

禮樂舊章ニ率由シテ改メズ

——北朝「周」の古代「周」王朝憧憬と庾信について——

難波江通泰

舊章率由（率由舊章）

天明七年（一七八七）六月より寛政五年（一七九三）七月までの六年間、松平定信（白河樂翁）は首席老中、將軍の補佐として鋭意弊政の改革につとめたが、その一環として人材の登用を重視した。『幽谷先生行狀』には、松平定信が藤田幽谷（藤田東湖の父。この時、十八歳）の名を聞いて其の文章を求めた。或る人がこれを幽谷に傳へて、「これこそ進んで幕府に仕へるべき絶好の機會である」と言ったところ、幽谷は笑つて答へず、即ち『正名論』を作つて君臣の大義を明かにし、これを定信に提出した。定信は内心、幽谷の登用を思つてゐたが、これを讀んで、事、遂にやんだ。と記してゐる。その『正名論』、終りに近い箇所に、

天朝開闢以來。皇統一姓傳之無窮。擁神器。握寶圖。禮樂舊章率由不改。天皇之尊。宇內無二。

と、萬世一系の天皇の尊きこと天下唯一であると記して國體の尊嚴を説いた。

この文中の「禮樂舊章率由不改」は、ここでは皇祖皇宗の遺訓遵守の意であるが、「舊章率由」（率由舊章）の語は『詩經』に見える語であつて、「大雅」（生民之什、假樂）に、

不愆不忘。率由舊章。威儀抑抑。德音秩秩。

とあり、先王の遺法、先王の道に遵ひ因るの意である。

孟子は『詩經』の此の語を踏まへて、

徒善不足以爲政。徒法不能以自行。詩云。不愆不忘。率由舊章。遵先王之法而過者。未之有也。（離婁上、首章）

と、先王の遺法に遵はない政治は徒善であり、法制もまた徒法であつて、あくまでも先王の道を行ひ、先王の道に因らなければならぬことを説いた。

ついで、時代は下つて六朝末、この語が庾信の詩歌に現れてくるのである。すなはち、「周祀 圓丘歌」（皇夏）に、

六典連事九司咸則。率由舊章於焉允塞。

とあり、また、「周祀 五帝歌」（皇夏）に、

神班其次歲禮惟常。威儀抑抑率由舊章。

とあるが、この庾信及びその詩歌に關しては後に觸れるであらう。なほ、右の「周祀」の周は北朝の周（北周）であること申すまでもない。

また、その北周の世系は左の通りである（數字は帝位繼承の順位）。



— 105 —

間、こと政治に關して、一切、意志を洩らさなかつた武帝は萬機を親裁して名實ともに嚴正なる王權を確立し、富國強兵の策を採つた。東（北齊）と西（北周）の抗爭は北魏が東西に分裂以來のことであつたが、建德四年二月武帝は北齊討伐の計画を進め、同年八月、北齊を攻撃して二年後の建德六年二月にこれを平定した。その銳鋒は、遊惰淫逸に流れてゐた陳の到底抗し得べきものではなかつたであらうが、不幸にして武帝は天下統一の志半ばにして崩じ（三十六歳）、その雄圖は空しく消え去つた。そして三年の後、この北周は隋の篡奪するところとなるのであるが、天、あと二、三年の壽命を武帝に藉したならば、北周による天下統一は實現されてゐたであらうとは一般の認めるところであり（岡崎文夫博士『魏晉南北朝通史』四一八頁）、また、武帝自身に天下一統の志のあつたことは、同文であるが遺詔（『北史』周本紀下第十、『周書』帝紀第六武帝、下）に明らかな通りである。この武帝の在位十八年間は、庾信四十九歳より六十六歳までの十八年間であるが、庾信はその三年後に、隋による北周の滅亡と、隋の建國を眺めながら六十九年の生涯を閉ぢた。

天下統一を志した武帝の統率のもと、新興國家北周の國家新秩序は着々と確立されて行かうとしてゐたが、さうした時代の息吹きを受けてか、庾信にはかつて見られなかつた郊廟歌辭や表（賀平鄴都表、賀新樂表）などが作られた。しかも、それに見られる如き、國家、王室、帝王を積極的に謳歌贊美した詩文は、南北朝全期を通じて他にこれを見ることは出来ないであらう。また、庾信が玉臺新詠などの風潮のもとで、そのまま南朝に終つてゐたならば、國家建設の意氣軒昂にして緊張感の漲る作品は得て期し難いものがあつたであらう。

庾信の父、肩吾

唐の林寶は『元和姓纂』を撰して「堯時[○]有掌庾大夫。以官命氏。」と、帝堯の時代の官に掌庾大夫があり、その職を表す「庾」の字が氏（姓）となったと記してゐるが、庾信自身も『哀江南賦』に「我之掌庾承周。以世功而爲族。」と、古代周王朝の時代に祖先が掌庾大夫であつて、それが姓となったことを記してゐる。その子孫は漢代にも晉の時代にも要職にあつて、潁川に住してゐたが、やがて、新野（河南省新野縣）に移つた。諸本、庾信の傳を記すに「南陽新野の人」とあるのはその爲であらう。が、庾信は、古代の周王朝以來の貴顯の出であることに誇りを懷き、また、後年、自分の仕へた國が同名の「周」であつたことにもよろこびを覺えてゐた様である。

西晉末の永嘉元年（三〇七）の七月、懷帝は瑯琊王司馬睿（後の東晉の元帝）を以て建業を鎮せしめた。この時、信の八世の祖の滔は司馬睿に従つて江を渡り、江陵に住した。官は散騎常侍、遂昌侯に封ぜられた。信の玄祖父の孜は南朝宋の時、巴郡の太守となり、曾祖父の道驥は安西參軍に任ぜられた。父の肩吾は梁の散騎常侍、中書令、そして度支尙書の官職にあつた。また、文詩人として幼少より高名であつて、『文選』編纂の一人でもあつた。侯景が反亂を起こした際、その配下の宋子仙が會稽を破つて庾肩吾を捕へ、これを殺害しようとしたが、肩吾が詩文の才に優れた著名な人物であり、この時強要せられた即成の詩が優れてゐたのでこれを釋放した（大寶元年七月。『南史』卷四十列傳）。その後、肩吾は江陵に赴き、江州の刺史、義陽の太守となつて武康縣侯に封ぜられたが間もなく死去した。大寶二年（元帝即位の前年、五五一年）の初冬であつたであらう。その翌年（承聖元年）の三月に、四年に亘る侯景の

變亂が鎮壓されて侯景は刑戮梟首に處せられ、肩吾の一周忌も近い十一月、梁の武帝（蕭衍）の第七子蕭繹が江陵で即位した。梁の元帝である。そして庾信は右衛將軍に轉じ、父肩吾が封ぜられた武康縣侯を襲ぎ、散騎侍郎を加へられた（倪璠註釋『庾子山（庾開府）全集』。以下、庾信に關しては概ね本書に據る）。

北周の江北平定と隋の天下統一

庾信は十五歳の時、東宮講讀として宮中で昭明太子に仕へ、四年後の中大通三年（五三二）十九歳の時、父の肩吾も太子の中庶子となり管記を掌つて、父子ともに宮廷に出入することが出來た。しかしこの年の四月に太子は三十一歳で薨じた。太子は『文選』の編者であつたが、薨後、その弟の綱が帝位に即いた。簡文帝であるが、帝は庾信と徐陵を抄選學士に選び、古雅な傳統を重視保持した『文選』とは對象的な、男女間の輕艶を謠ふ新體詩（宮體詩）の『玉臺新詠』を編せしめた。そして庾信と徐陵の詩風は「徐庾體」と贊美されて一世を風靡し放蕩文學の端緒をなした。そしてこの時に起こつたのが侯景の反亂であつた。

その反亂鎮定二年後の承聖三年（五五四）、魏（西魏）の宇文忠恕が使節として梁に來聘した。その答禮使節としてであらうか、庾信は魏に使い長安に到つた。その後間もなく、昭明太子の第三子晉が魏に臣屬して本國の梁に反き、魏の軍と共に梁を攻撃して江陵は陷落し、簡文帝は執へられて戕殺され、晉は一小國「後梁」を建て、魏は晉を梁王としたが、嚴しい軍政下に置いて終始これを監視した。やがて梁は陳霸先（陳の武帝）に篡奪された。そして魏もまた周（北周）の宇文覺に篡奪され、この宇文覺（閔帝）も從兄の宇文護に弑され、その宇文護も、かつて己れが弑し

た閔・明二帝の弟の邕（北周の武帝）によって誅戮された。

かくして南北朝時代末期の支那は、江南は陳が、江北は北齊と北周が二分して三者それぞれ領有した。やがて北周は北齊を伐つてこれを亡ぼした（五七七）が、その翌年六月武帝が崩じ、後嗣の靜帝は幼弱であつた爲、外戚の楊堅（隋の文帝）に帝位を篡はれた（五八一）。また、南朝の陳も後主（陳叔寶、宣帝の長子）を始め群臣達は、隋が陳討伐の詔を下してゐたにもかかはらず、酒色に溺れて奢侈を喜び、軟文學に耽つて安易に構へてゐた爲に、殆ど無抵抗状態で隋に亡はされた。顧炎武が『日知錄』に「江南之士。輕薄奢侈。梁陳諸帝之遺風也。」と記し、杜牧が『泊秦淮詩』に「商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花」と詠じた如く、奢侈に耽つて自ら亡國の道を選んだのであつた。

しかしながら、天下統一の業を成し遂げた隋は、十五年後に皇太子楊廣（煬帝）によって父の文帝は弑せられ、煬帝も奢侈荒淫、十四年後に宇文化及の弑逆に遇つて隋は滅亡し、李淵が高祖として帝位に即き（六一八）、世は唐の時代へと遷つて行つた。

庾信一族の長安定住

西魏が江陵を攻略した際、梁の王子、王公ら十萬餘人が俘虜として長安に連れ去られて奴婢にされ、老弱幼少なる者はすべて殺戮された、その俘虜の中に庾信の妻子、兒女、老母らが含まれてゐた。宇文泰は庾信が徐陵と並んで著名な文詩人であり、名士であることを知つてゐたのでその家族をすべて庾信のもとへ届け、高官として庾信を遇した（譚正璧、紀觀華選註『庾信詩賦選』序言五―六頁）。やがて梁は陳に滅ぼされ、北周と陳は好を通じて、南北流寓の

人々をその故郷に還らしめることになったが、庾信と王褒の二人は愛惜されて歸郷を許されず、長安で一生を終へた。庾信の、沈痛なる郷愁と亡國の悲哀を謡った有名な賦が「哀江南賦」である。

庾信が長安に使として到着した承聖三年は四十二歳であつた。幼少期の十餘年を除いての二十數年間は、梁にあつて徐陵と共に豔麗の詩文をよくし、一文ある毎に都下に傳承せられ、後進は競つてこれを模倣し一世を風靡した。後半は驍騎大將軍儀同三司司宗中大夫の非常な高位に進んだが、家族と共に異國に拘留せられて江南の空を仰ぐ二十數年であつた。

後世、陶淵明、鮑明遠、謝靈雲と共に六朝の四大家と呼ばれ、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王ら唐初四傑の先驅とも讃へられたが、豔麗な前半に較べ、後半はまことに深刻なる蒼涼の半生であつた。

孝文帝（北魏）の漢化政策

五胡十六國の五胡のうち、最も強大であつた種族は匈奴と鮮卑であつた。古來、漢民族は周圍の民族を輕蔑的な文字で書き記したことは周知の通りであるが、「鮮卑」の語は、その種族の故地興安嶺の山名「大鮮卑山」に依ると傳へられてゐる。その種族の中でも勢力の盛んであつたのが慕容氏と拓跋（托跋）氏であつた（拓跋の拓は鮮卑語で「土」、跋は「后」の意と言はれてゐるので拓跋は「土后」の意であらう）。

西晉の永興元年十月（三〇四）、匈奴の劉淵が漢（趙）を建設し、また、八十二年後の東晉の太元十一年一月（三八六）には拓跋珪が「代」（山西省北部）の王となつたが、四月に國號を「魏」（北魏）と改めて皇帝と稱した。すなは

ち北魏の第一世道武帝である。そして、魏の太平眞君元年は南朝宋の元嘉十七年（四四〇）であるが、北魏は江北を統一して宋と對峙し、南北朝時代に移つて行くのである。が、右の永興元年（三〇四）より元嘉十六年（四三九）までの百三十五年間に五胡十六國の時代で、その間に前涼、前秦、北燕、北凉など十六國の興亡があった。また、右の太平眞君元年（四四〇）より、隋が天下を一統した開皇十年（五八九）までの百四十九年間に後世謂ふところの南北朝時代である。

北魏の第六世の孝文帝は、自分の出身である鮮卑の風を野蠻として嫌ひ、萬事、支那風を慕つた。すなはち、自らの複姓の拓跋氏を支那風の單姓の元氏に改め、國民にも支那風に改姓することを強制し、鮮卑の言語の使用を禁止し、鮮卑の衣服の着用も禁じ、國都を平城（今の山西省大同縣の東）から支那文化の中心地洛陽に遷し、北方の故地を慕つて禁令に従はない者はこれを害した（太子の恂は、その爲に死を賜はつてゐる。「魏書」卷二十二列傳第十一「廢太子庶人恂」）。

また、孝文帝は漢詩文（支那文學）にも長じ、これを慕悦愛好してゐた。が、『北史』文苑傳の序によれば、この時代（太和年間）は「律調頗殊。曲度遂改。辭罕泉源。言多胸臆。潤古彫今。有所未遇。……眇歷歲年。未聞獨得。」と、その詩律、曲調ともに特殊で、表現も言葉も風雅とは稱し難いものがあつたやうであるが、一方では、夏、殷、周の三代を理想の時代とし、これに非常な憧憬を覺えてゐた。従つて、強行された過渡期であつた爲に摩擦、軋轢、混亂が數多く發生したが、孝文帝在世中はこれを凌ぐことが出來た。この漢化政策の影響を受けてであらうか、北魏末の重臣の宇文泰（後の北周の太祖文帝）は「崇尚儒術。明達政事。……性好朴素。不尚虛飾。恒以反風俗。復古始爲心。」（周書帝紀第二文帝下）と唐の李延壽は評してゐるが、それは尙古を重んじた名臣蘇綽の參画に預るところ大

なるものがあつたであらう。

やがて、前述の如くこの北魏は東西に分裂し、宇文泰は西魏の太師となるが、その没後、三男の宇文覺は西魏を篡奪して北周を建國した。が、この宇文覺（閔帝）も、明帝も、二帝ともに伯父の宇文護に弑され、宇文邕（武帝）が帝位に即いてこの宇文護を誅殺し、嚴正なる絶對君主として北周を統率するのであるが、新國家建設の氣風は盛大なるものがあつたであらう。

北周の古代周王朝憧憬

庾信は梁の武帝の天監十二年（五一三）に生まれ、幼少より俊邁聰敏で群書を博覽したが、中でも『楚辭』の造詣が深く、特に『春秋左氏傳』には最も精通してゐた。晩年、周にあっては武帝の寵愛を受け、諸王からは敬意を表され、群公からは碑誌の請託を受けること多く、洛州の刺史として治下の信望も篤かった。（『周書』卷四十一庾信傳）『史記』（樂書）や『樂記』、或は『荀子』（王制篇、樂論篇）などによると、古來、帝王の功成り、治定まつて禮樂を起こし、また、秩序の亂れんことを惡んで禮及び雅頌の音を制して民を善導したことを記してゐるが、『隋書』（樂志）に、

天和元年。武帝初造山雲舞以備六代。南北郊。雩壇。大廟。禘祫。俱用之。六舞者。大夏。大護。大武。正篇。山雲也。於是。正定雅音。爲郊廟樂。

と、北周の武帝に到つて雅音が正定され、郊廟の樂が作られたことを記して居り、この時の「郊廟歌辭」、すなはち、

周祀圓丘歌、周祀方澤歌、周祀五帝歌、周祀宗廟歌、周大禘歌、燕射歌辭のおよそ六十六首は總て庾信の手に成るものであり、その中の燕射歌辭の商調曲に、

惟翰惟屏。撫撫于周原。功成而治定。禮樂斯存。

とあるが、これは『詩經』（大雅、文王之什、綿）の「周原。撫撫。萁茶如飴」に據つてゐて、「詩經」の周原（周）は古代の周王朝のことであるが、庾信の方は北周を指してゐるのである。兩者、國號が同一であるのは、古代の周は岐山（現在、陝西省岐山縣）の下の周原が故地であり、北周も宇文覺が建國直前にその地に周公として封ぜられ、それが國號を「周」と稱したからである。が、當然それは北周をして、古代周王朝を理想の國家として憧憬せしめると共に、その復活は不可能としてもそれに近い理想國家再現の夢をも與へ、その新國家の建設に邁進せしめることになるであらう。しかも、尙古の氣風は北魏の孝文帝以來すでに培はれてゐた。宇文泰（文帝）は前述の如く、儒教を尊ぶ尙古の人であつたと言はれた。また、明帝が定めた年號の「武成」は『書經』の周書の篇名であつた。その武成三年は改元で保定元年であるが、その年の正月、武帝はその詔に「周文公以上聖之智。翼彼姬周。爰作六典。用光七百。……我太祖文皇帝……能捨末世之弊風。蹈隆周之叡典。」と、周王朝の榮耀を讃へ、父の文帝は弊風を除去して周王朝の叡典に浴さうとしたのであると述べ、更に、天和元年五月の詔には「朕雖庸昧。有志前古。……昔周王受命。請問顓頊。廟有戒盈之器。室有復禮之銘。」と、周王朝創業の古昔を念頭において、輕佻浮薄に流れることを戒めた。

高祖武帝の抱負

先に、この天和元年十月に武帝は山雲舞を造り、六代の樂に備へたことを記したが、七年後の建德二年十月に六代の樂が成り、武帝は百官を集めて崇信殿で觀樂をした。その時、庾信は「賀新樂表」たてまつを上つた。その中に、

我太祖文皇帝。體國經野設官。變魏作周移風正雅。

と、文帝の功業を讃へてゐるが、これは『周禮』（六官の序官）の「惟王建國辯方。體國經野。設官分職。以爲民極。」に據つてゐるのであつて、官制を周王朝の古制に規範を求め、それに準ぜんとしたことのあらはれであらう。

宋（趙宋）の陳傳良が『歷代兵制』に、北周の六軍の制は周禮に倣ひ、古代の兵農未分の舊制を復活したことを言つてゐるが、北周は周王朝の古正なる制度への復活を志向し、確乎とした官統を圖つたことがうかがへるのである。しかも、北周のこの時の官制は唐の六典に影響を與へてゐるやうである。北周が周王朝の禮樂、刑政に據らんとしたことは、すなはち「禮樂舊章率由」といふことは、前記以外にも庾信の作にこれを見ることが出来るのであるが、ここでは武帝のことに關して若干觸れたい。

その一は、干戈倥傯漸く收まらんとするの日、當時、三禮の大家として著名であつた熊安生の家宅に行幸したことがある。それは武帝が如何に儒教を重んじてゐたかを示す好例の一であらう。熊安生の傳は『周書』卷三十七、『北史』卷七十の儒林傳に詳しく、『二十二史劄記』卷十五、卷二十などにも記されてゐるが、武帝が北齊を擊破してその都城の鄴に入城したとき（建德六年正月七日）、安生は八十餘歳の老齡であつた。その翌日、安生は突然、家人に門の清掃

を命じた。怪訝な思ひの家人に安生は「武帝は道を重んじ、儒を尊ばれる方であるから、必ず我が家に幸せられる。」と言ったところへ行幸があり、帝は安生の手を執つて同坐し、武帝の質問數箇に安生は答へ、帝は非常な満悦を覺えて禮を厚くした。そしてその翌年、安生はこの世を去り、武帝も崩じた。文字通り一期一會の出來事であつた様である。

また、武帝に關して特筆すべきことは内政、軍事、外交などの爲に、完全ではなかつたにしろ三年の喪を實行したものである。天和元年八月、武帝は、

諸有三年之喪。或負土成墳。或寢苦骨立。一志一行。可稱揚者。仰本部官司。隨事言上。當加弔勉。以厲薄俗。と、「艱苦を堪へ凌んで三年の喪を行ふ者の志と行ひは稱揚すべきである。該當の官員はその都度上奏して慰めはげまし、人情浮薄な者を激勵するがよい」との詔を下した。しかもそれは、國民に對する號令、要求のみではなかつた。その八年後の建德三年（五七四）三月、生母の皇太后叱奴氏が崩じた。武帝は詔に母を慕ふの情の切々たるものを述べ、三年の喪は古今易らざるものであつて王者たるもの常に行ふべきである。が、今は内政、外交、軍事、多端の時であるので緩麻の節と苦廬の禮は前典に率遵してこれを行ふことを下達した。群臣は種々意見を奏上したが帝は古禮を以てこれに答へ、一切、それらを許さなかつた。支那歷代帝王の中で三年の喪を實行した數名の中に、この武帝が擧げられてゐる。そして四年後の宣政元年（五七八）六月、武帝崩ずるの際の遺詔に、

朕君臨宇縣。十有九年。未能使百姓安樂。刑措罔用。所以昧旦求衣。分宵忘寢。

と、「自分は帝位にあること十九年、未だ國民をして安樂に、刑罰を用ひない太平の世となすことが出來ず、日夜政務に盡瘁した」と述べた。先に記した如く、武帝の志は北周をして古代周王朝の如くたらしめ、太平安樂の世たらしめ

んとするにあつたが、多くの夢を遺して三十六歳で崩じた。

宋の太宗の日本羨望

右の遺詔の「刑措罔用」は『史記』（周紀）の「成康之際。天下安寧。刑錯四十餘年不用」のことで、古代周王朝の成王、康王の時代の四十餘年間、刑罰が行はれなかったことを支那では「成康之治」と稱して非常な誇りにして來た。そしてそれは武帝の理想の統治とするところであつたであらう。しかしながら、日本では、その様な傳説に近い古い時代のことでは無く、嵯峨天皇の弘仁元年（八一〇）の藤原仲成の處刑より、保元元年（一一五六）の保元の亂の處刑まで三百四十六年間、いはば平安時代の全期間死刑は執行されなかつた。歷代陛下が死一等を減じて死刑を許されなかつたからであつて、平泉澄博士はこのことを『父祖の足跡』（一九三二〇五頁）に詳述して居られる。

また、この平安時代の中期、圓融天皇の永觀元年（九八三）八月に東大寺の僧テウネン裔然が入宋し、三年後の花山天皇の寛和二年（九八六）八月に歸朝した。宋に於ける裔然のことは日本の書物には記されず、『宋史』卷四百九十一の列傳第二百五十「外國」七の「日本國」の條に、雍熙元年に日本の僧の裔然が數名の仲間と海を渡つて來て、銅器十餘と「職員令」「王年代紀」を太宗皇帝に献上したとあり、その「年代紀」には天御中主に始まり天照大神尊を経て、神武天皇以下歷代天皇が記され、時の今上陛下まで凡そ六十四世であると記し、ついで、山城、大和、河内などの國名が記されてあつた。裔然は支那語に通じないので筆談であつたが、太宗皇帝は裔然を非常に優遇した。そして日本は、天皇は萬世一系、臣下はすべて世襲の官であると聞いた皇帝は感歎して、宰相に向ひ、

世祚遐久。其臣亦繼襲不絕。此蓋古之道也。

と、「皇位は悠遠に、臣下は世襲して絶えないといふことは古への聖王の道である。」と言ひ、更に、支那は唐の末期より動亂、興亡うち續き、大臣の世襲は少なく、自分は不徳の身ではあるが、日夜そのことを考へ努力してゐるのであると語り、續けて、

建無窮之業。垂可久之範。亦以爲子孫之計。使大臣之後世襲祿位。此朕之心焉。

と、「無窮の業を建て、永久の範を垂れて子孫の計となしたい。また大臣の子孫にも祿位を世襲させたい。これが自分の心から念願してゐることである。」と、「年代記」を見、齋然の述べることを聞いて、日本こそが理想の國であると驚歎羨望したのであった。

先の『正名論』、その記すところ簡潔ではあるが、遠く遡つては「天壤無窮の神勅」を仰ぎ、近くは「教育勅語」を拝するに他ならず、而してその引用するところの舊章率由（率由舊章）の語は、名實ともに、我が國にのみ一貫して存することであつて、『神皇正統記』巻頭の、

大日本者神國なり、天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ、我國のみ此事あり、異朝には其たぐひなし、此故に神國と云ふなり。

の語の生々躍動するを覺える。

※主要なる引用、参考文献は本文中に記したので改めて注記しない。